

大阪支部結成 50 周年と私

愛知支部 堤 吉郎

先達としての大阪支部

私にとって大阪支部は、先を歩く先輩であり、敬意を表する対象であり、お手本である。送っていただいた黒井さんの論考や岨さんの書かれていることを見れば明らかである。私の同志会との出会いは 1977 年である。長野県志賀高原で開催された夏大会が初参加である。愛知の成瀬さんから「愛知の方ですか」と声をかけられ、隣にいた男性を「中村先生です」と紹介された。その時は（ああ中村という人か）とだけ思った。後に『近代スポーツ批判』を書いた中村敏雄さんだとわかって恐縮した。



笑いの先達

同志会の夏大会に初参加した翌年、1978 年に愛知支部が結成される。その後、1981 年の夏大会は岐阜県の恵那で開催された。東海ブロックの仲間と運営を担った。分宿であった。新しいホテルから古い旅館まであり、宿舎の待遇に格差があった。こともあろうに大阪支部の宿舎は古い旅館、橋本屋であった。待遇に不満のたまる大阪支部であったが、合宿最後の夜の交流会（大レク）で不満をみごとに笑いに替えた。「うちのホテルの夕食、ステーキや」「うちらはなあ、コロッケや」、「うちのホテルの風呂、泳げるでえ」「うちらはなあ、寝そべらんと湯につかれへん」…爆笑であった。

愛の水中心花も山本リングダも目撃した。昼間、話していることとのギャップがすごい。黒井さんの小咄も記憶している。「なんやこの乳（ちち）、薄いなあ」「水牛の乳や」、「父ちゃん、なんでわい一人っ子や」「おまえが早よ寝んさかいにや」…。これに刺激された。高校 3 年生の受験勉強期間中に友達とやっていた「寿限無」を思い出し、寿限無がドル平を教わるというネタを思いついた。大阪支部のおかげである。

プロジェクトの先達

1981年に大阪から出原さんが来た。遊びに来たわけではない。大阪の高校から愛知の大学へ、勤務地が変わったのである。次々と新しい実践・研究を進めている大阪からやってきたのである。月1回の「学習会」が始まった。岩波書店の『子どもの発達と教育』（全8巻）を読む。翌年、出原さんいわく「月1回では忘れてしまうなあ」。それで週1回の「水曜学習会」が始まる。

研究は1人ではなかなか進まない。「大阪支部がプロジェクトを始めたでえ」と出原さん。保育所の先生や特別支援学校（養護学校）の先生といっしょに「発達と教育プロジェクト」を始める。略して「ハッキョウプロ」と称した。学校が終わると保育所の先生の家みんなが集まってくる。2時間ほどの学習が終わると一杯やる。集まりが悪いときは一杯やるところから始まる。本当に学習してたのか。学んだ理論を現場の具体的な実践と結びつけるので日々の実践に大いに役に立った。一番長く続いたプロジェクトである。

研究・実践の先達

大阪支部がポドテキストに取り組んでいた頃、宇野重吉の演出ノート『桜の園』を読んだ。同志会より前に出合った「大阪国語の会」で宇野重吉が講演した。「のっけからボーと汽笛が鳴る…」と語り始めた。講演が終わると野名龍二さんが宇野さんに色紙をいただいたという。「釣れてもよし釣れなくともよし川の魚」。野名さんが「わかってもよし、わからなくてもよし…」ともじった。

大阪国語に通ううちに縁があって野名さんに奈良の飛鳥を案内してもらったり、愛知に来てもらって綴り方の話をしてもらったりした。愛知にやってきた武田さんと元同僚だったこともわかった。榊原さんとも民教連などでつながりがある。また、石谷さんの奥さんが私と同じ大学の先輩であることがわかり、土佐いく子さんらと「なにわ作文の会」をしているとのことで、2・3回、会におじゃましたことがある。

出原さんが愛知に来てすぐ、当時丸山さんのいた名古屋工業大学で「田植え走」の実技をした。私の50m走の足跡は2本ラインになっていた。長年、器械運動をしてきたので、跳馬の助走でからだぐれないように上体を正面に向けたまま走るのそうなのかなあと思う。クラスの子もたちとやってみても何人かの子もは足跡が2本ラインになるので違うのかも知れない。クラスの子もたちに「田植え走」をして、まっすぐ走る練習や腕振りを意識させたりして、多くの子もがずいぶんとタイムアップをした。これを冬大会で意気揚々と報告をした。その場にいた榊原さんに「で？」と言われた（本人は覚えていないというが…）。「何のために何を」「何をどのように」したのか、「何を問題提起（提案）」したかったのか、うまくするだけでは実践提案にならないということを学んだ。黒井さんには耳元でささやかれ本を買わされた。

こうしたことの積み重ねで、私はずいぶんと鍛えられた。私の嚆でした。